Equatorial Biomass Society No.22
December 2014

22

熱帯バイオマス社会

調査報告
ビントゥル都市部およびその周辺地域におけるスクウォッター集落
―地区ごとの特徴と開発による住民移転の動き―
池田 愉歌／ロギー・スマン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
「交流の場」としての闘鶏―
―都市移住民の娯楽と文化
祖田 亮次／池田 愉歌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
低価格バードハウスの建設条件
ロギー・スマン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
プロジェクト参加メンバー紹介・・・・・・・・・・・・・・ 18

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(S)

東南アジア熱帯域における プランテーション型バイオマス社会の 総合的研究

ビントゥル最大級のショッピングセンター Citypark Mall 内部
（写真：池田 愉歌）

調査報告

ビントゥル都市部およびその周辺地域におけるスクウォッター集落 ―地区ごとの特徴と開発による住民移転の動き―

池田 愉歌（大阪市立大学 文学部）
ロギー・スマン（元マレーシア・サラワク森林局）

1. はじめに

都市部には、農村部から出てきて生活している人が数多くいる。ビントゥル省においても、開発の進行に伴い多くの人々が都市部へと移動している。しかし、彼らが移動先の地域でどのように生活を送っているのかについての調査は、これまであまり行われていない。都市部と農村部は密接に関係しあっており、都市部について知ることが、農村部に対する理解を深めることにも繋がると言える。

特に、都心から近く便利で、しかし居住費がほとんどかからないスクウォッター集落は、十分な資金を持たない人々にとって農村からの移転先として非常に好都合な場所である。スクウォッター集落の立地や発生・成長時期、住民たちの生活様式などから、その都市の発展過程や周辺地域の社会状況を読み取ることもできるだろう。

1980 年代初頭のビントゥル省では、上中流域での商業的木材伐採の活発化に加えて、マレーシア液化天然ガス（MLNG：1978 年設立）およびアセアン・ビントゥル化学肥料（ABF：1980 年設立）の設立に伴う経済の急成長により、ビントゥル都市部およびその周辺にスクウォッター集落が出現した。旧市街近くのセビウ（Sebiew）川沿いには、1980 年頃すでにスクウォッター集落が存在していたが、1980 年代半ば～後半になると、職場に近いという理由からキドロン工業地帯の多くの箇所でスクウォッター集落が出現し、急速に拡大するようになった（表 1 参照）。

MLNG と ABF が発展し、木材の価格も良かった 1980 年代末から 1990 年代初期にかけて、第二の急成長が起きた。キドロン地区には、天然ガスや化学肥料関連の工場が多数建設されるようになり、一方、クムナ橋周辺の工業地帯にはいくつかの合板工場が建設され、都市近郊の労働需要が劇的に増大した。こうしたビントゥルの工業発展の中で、スクウォッター集落が拡大していったものと思われる。近年の動きとしては、サラワク再生可能エネルギー回廊（SCORE）の事業展開や、シミラジャウ（Similajau）工業団地建設などがあり、ビントゥルの工業発展は現在も継続している。こうした流れの中で、旧市街地からキドロン地区、新ミリービントゥル道路沿い等に点在するスクウォッター集落は重要な開発用地とみなされ、数年前から立ち退きが進められている。スクウォッター住民を移転させるために、空港近くのスガン（Segan）地区にスクウォッター住民移転用の住宅団地が建設され、その他の場所にも再定住地区が建設され始めている。ビントゥルにおけるスクウォッター集落は新たな局面を迎えていると言える。

著者らは、2014 年 8 月 26 日～ 9 月 15 日に、ビントゥルの都市部およびその周辺のスクウォッター集落、元スクウォッター住民が住む住宅団地で聞き取り調査を行い、53 件のスクウォッター住民および元住民から回答を得た（現住民 35 件、元住民 18 件）。彼らに話を聞いたところでは、村から都市に移る主な理由は豊富な就労機会や高い賃金、教育の質の高さ、病院やクリニックといった施設の充実などであった。また、都市の中でもビントゥルを選ぶ理由としては、故郷から近いという理由に加え、他の都市に比べ特に仕事が多い、賃金が高いという意見が目立ち、遠方からビントゥルにやってきたという事例も数多く見られた。

スクウォッター住民自身への聞き取りに加え、土地測量局をはじめとする行政機関等で資料収集をしたほか、住宅開発公社（HDC）での聞き取り調査も行った。なお、土地測量局が作成したリストでは、ビントゥル都市部、つまり、ビントゥル開発局（BDA：Bintulu Development Authority）の管轄内にあるスクウォッター集落は 13 か所とされていたが、実際に確認できたのは 10 か所だった（表 1 参照）。確認できなかった場所は、開発が進んだことが原因で姿を消したと思われる集落が 2 か所、Google Earth の画像では現存するように見えるがそこへのアクセス道が分からなかった集落が 1 か所である。実際、工業地区として集中的に開発を進める地域に指定されたキドロン地区のスクウォッター集落（図 1 の番号 3 ～ 8）では、複数の集

落で、住宅・商業開発に伴う土地造成工事がすぐ近くまで迫り、再定住政策を利用したり、他地域に自主的に家を手に入れたりするなどして、住民の転出が進んでいる。

今回の調査で得られた情報に基づき、第 2 章ではビントゥル都市部のなかでも特に開発が進むキドロン地区のスクウォッター集落について、第 3 章ではその他のスクウォッター集落について、各特徴を述べていく。第 4 章でスクウォッター集落から転出する動きに注目し、行政の政策や住民を取り巻く環境についてまとめ、第 5 章では、他の都市と比較した際に見えてくるビントゥルの特徴として、政治的な交渉力について考察する。

表1：ビントゥル都市部のスクウォッター集落一覧とその現状

番号	スクウォッター集落名（土地測量局による呼称）	地元住民が用いる集落名	土地測量局によって存在が認識された年	現存世帯数	備考
1	Behind Market Garden	Kpg. Petani	1993	29	
2	BDA Nursery / Burrow Pit	Taman Bundai BDA	1995	30	
3	Sg. Plan (Kidurong) *	Sg. Plan Round About Sg. Plan Babi	1989	206	
4	Muzako North (Kidurong)	Muzako	1984	354	
5	Muzako South (Kidurong)	Hock Peng	1989	323	
6	BDA Worker's Camp (Kidurong)	Pasir Puteh	1995	274	
7	Sg. Sebatang (Kidurong) *	Sebatang Vocational Sebatang Tengah (Sebatang Tuak)	1987	494	
8	Park & Green (Kidurong)	Kpg. Sebatang Klapa	1986	32	
9	Simpang ABF / MLNG Housing	Sg. Seterus	1999	23	
10	Opposite Kidurong Club		1992	10	存在確認できず
11	SJK Chung Hua (Bukit Nyabau)		1990	9	存在確認できず Google Earth によると現存可能性大
12	DCA Beacon Site		1990	26	存在確認できず
13	RPR Sebiew / Pulau Sebab	Belakang RPR Sebiew	1982	175	

データが古いため世帯数については信頼性が低い。
土地測量局の資料では 2014 年の数値とされているが、実際には数年前の数値と思われる。

* 土地測量局では一つのスクウォッター集落とされているが、地域住民たちは異なる集落と捉えている。

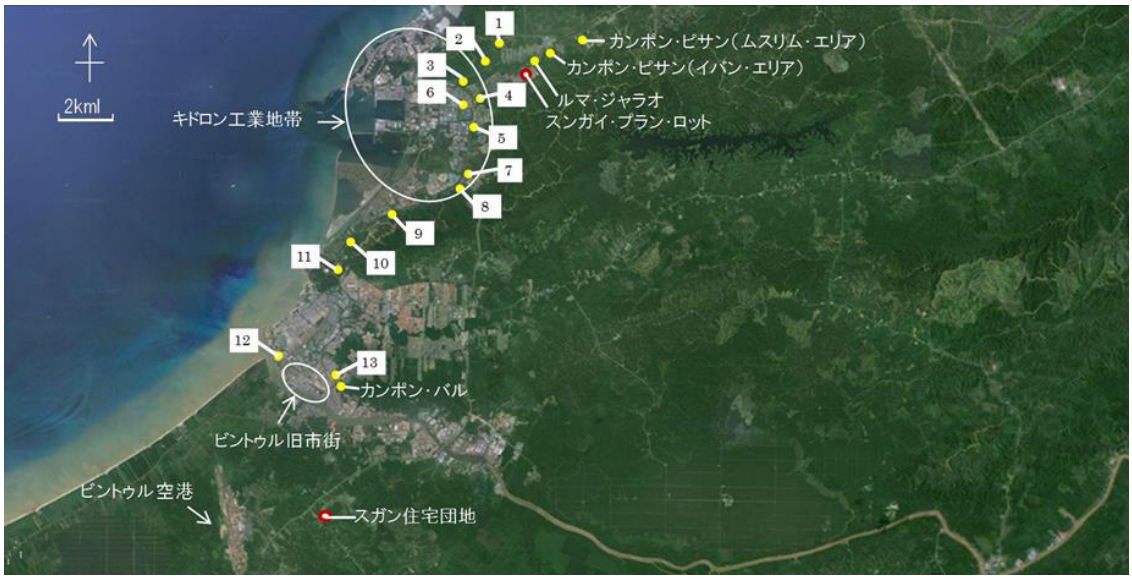

図1：主な調査対象地域の分布（番号は表１と対応）

2. 工業開発により成長したキドロン地区のスクウォッター集落

工業地帯に指定され、ビントゥルの中でも特に多国籍企業の参入や開発が進むキドロン地区では、発展に伴い多くの人が流入し、写真１のようなスクウォッター集落の著しい成長がみられた。図１の番号３～８のスクウォッター集落はキドロン道路沿いに立地しており、スクウォッター集落がこの地区へ集中していることが分かる。しかし、近年では更なる開発を可能にするため、行政や企業によるスクウォッター住民の立ち退きが進められている。実際、いくつかの集落では、空き家となっている住居や解体途中の住居（写真２参照）もあり、それらの集落の裏手にはショップハウスや住宅の開発がすぐ近くまで迫ってきている（写真３～５参照）。

キドロン地区のスクウォッター集落の特徴としては、住民のほとんどがイバンという民族であること、キドロン地区の各工場の労働者であること、仕事を求めてクチンやシブ周辺といった遠方からもこの地区へ相当数の人が入ってきていること、小学校卒業または中学校卒業以下の低学歴の人が多いということが挙げられる。スクウォッター集落で聞き取りを行った34人の世帯主の学歴を見ると、無就学５人、小学校中退８人、小学校卒業６人、中学校卒業３人となっており、高校卒業（Form5 終了）者は３人のみであった（不明９人）。急激な開発が進むビントゥルでは、建設現場での単純作業やドライバー等の仕事が数多くあるため、学歴の低い人や特別なスキルを持たない人でも容易に仕事を見つけることができるのである。

スクウォッター集落に新たに入る際、住居をどのように手に入れたかを聞いたところ、「購入した」という人が回答者の半数近くにのぼった。スクウォッター集落の住居は、個人で建設するものと考えていたが、購入したという答えが多かったのは意外であった。家屋を購入することは、自分で建てるのに比べて即時入居が可能であるだけでなく、水道局から引かれている公的な上水道を利用出来るなど生活に便利である[1]。逆に、自分で新たに家をつくろうとすると、行政の目に留まり撤去される可能性が高いことも、家屋の購入が多い主要な理由の一つとして挙げられた。

また、一部のスクウォッター集落では、流入者が自ら公有地に住み付いたのではなく、増加した労働者の居住地を確保するため、行政や企業が公有地に労働者用の住居を建設し、そこに住まわせたことで、現在スクウォッター集落になった場所もある。例えば、表１の番号６がそれにあたり、名称も「BDA Worker’s Camp」となっている。つまり、ビントゥルの都市開発行政の主導権を握る公的機関 BDA が、キドロン地区の開発に際して、労働者用バラックを建設したことが、このスクウォッター集落の発生契機となっている。これも、ビントゥルの急速な発展と関係する事象として注目に値する。

住民の多くはキドロン地区で働く労働者とその妻子であるが、都市での生活を望むのは若者だけではないようで、退職後もビントゥルの街に残りたいと話す人も珍しくなかった。なかには、ずっと村で農業をしていたが、歳をとり妻も亡くなったため子供のいる都市に最近出てき

たという人もいた。彼らが居住地として都市を選ぶ大きな理由は、病院やクリニックが近いという利便性がある。特に、公営の病院（General Hospital）だと年金受給者であれば医療費が無料となる。また、数例ではあるが、ビントゥルのスクウォッター集落に滞在していながら、夫が他地域へ出稼ぎに出ているという事例もあった。ある家族の場合は、最初はビントゥルで仕事をしていたが、現在はより給料のいいクアラ・ルンプールへ働きに行っている。しかしクアラ・ルンプールは物価も高く生活費がよりかかるため、家族はビントゥルに残っていると話していた。

このように、工業地帯に指定され近年ビントゥルの中でも特に開発が進むキドロン地区では、幹線道路沿いにスクウォッター集落が集中して点在し、多くの賃金労働者とその家族が生活している。車やバイクを所持している世帯も珍しくはなく、就労機会が多いためか、ある程度の収入を得られている様子がうかがえた。また、この地区では、さらなる開発の進展に伴い複数の集落で立ち退きが進められ、空き家が目立っていた。住民の構成を見ても、遠方出身者や低学歴者、高齢者といった人々が多くこの地域に移転してきている。これらは、開発の最中にあり、単純作業の仕事が多くあり生活も便利であるといった、この地区の特徴が大きく影響していると考えられる。

3. キドロン地区以外のスクウォッター集落

前章では、キドロン地区を中心にスクウォッター集落の概要を紹介したが、ビントゥル都市部やその周辺にはその他にもスクウォッター集落やそれに準ずる集落が存在し、それぞれ特徴的な点がみられる。

写真1：キドロン地区のスクウォッター集落（Park and Green）

写真 2：空き家になったスクウォター住居（Sg. Sebatang）

写真 3：スクウォッター集落の背後に開発が迫る（Sg. Sebatang）

写真 4：スクウォッター集落の背後に開発が迫る（Park and Green）

写真 5：スクウォッター集落の背後に開発が迫る（Sg. Plan）

(1) RPR セビウ――旧市街に隣接するスクウォッター集落

ビントゥルの旧市街地近郊にもスクウォッター集落が存在する。旧市街地から約 2km 西に位置する RPR セビウ（RPR Sebiew）というスクウォッター集落（図 1 の番号 13）では、市場（いちば）で自分の店を持つ目的で農村部からここに移住してきた人々に出会うことができた。

ある夫婦は、夫がキドロン地区で働きつつ妻が公設市場に店を出しており、またある人はこのスクウォッター集落に来てしばらくの間古着屋を経営し、その店をたたんだ後キドロンで労働者として働いていたという経験を持っている。彼らは、ビントゥル旧市街付近での商業活動と、キドロン地区での労働とを上手く組み合わせながら生計を立てているように見えた。

RPR セビウでは、ダイバーの仕事をしているという人にも出会った。ダイバーとは、海底に潜ってそこに沈められたガス・パイプの状態のチェックやメンテナンスをする仕事で、命の危険を伴う代わりに賃金は非常に高い。1 回のダイブで RM1,500 だという。ただし体への負担から、潜れるのは 1 日 1 回だけと決められている。

また、住民はほぼイバンのみであるが、ムスリムが近くに住んでいるためか、家を建てる際に土地をムスリムから買ったという人が少なくないようだった。おそらく、インフォーマルな個人間での売買であると思われるが、州有地でありながら土地の売買まで行われているという話を聞いたのはここだけだった。

(2) カンポン・プタニとカンポン・ピサン…農村的性格を持つスクウォッター集落

キドロン地区にほど近い場所で、シミラジャウ工業団地に向かう道路（新ミリービントゥル道路）の周辺にも、いくつかのスクウォッター集落が存在する。図 1 で示した、カンポン・ピサン（Kampung Pisang：写真 6 参照）（10 世帯：イバン 7 世帯、ムスリム 3 世帯）とカンポン・プタニ（Kampung Petani：表 1 の番号 1）と呼ばれている集落である（25 世帯[2]：全てムスリム）。これらの集落は、住民が比較的少なく、まだ開発されていない十分な土地があって、多くの人が本業または副業として米や野菜、アブラヤシなどを育てている。他のスクウォッター集落でも小規模の畑をつくっている人はいるが、これら 2 つの集落は農耕面積が他集落よりも大きいことが最大の特徴である。彼らは自ら森を開き、そこに自分の畑をつくったという。私たちがインタビューしたサバ州出身のブギスの男性は、1,700 本のアブラヤシを植えていた（写真 7 参照）。

注意すべきは、カンポン・プタニが土地測量局のスクウォッター集落のリストに挙がっているのに対し、カンポン・ピサンはリストに入っていないという点である。土地測量局の職員によると、これは、前者がビントゥルの都市域に含まれている一方、後者は都市域から外れているために土地測量局のリスト化の対象になっていないというが[3]、両集落の距離はそれほど離れておらず（約 2km）、いずれも農業生産が盛んに行われており、集落景観としては類似している。これらの集落は、キドロン工業地帯にも近い場所にあり、賃金労働と農業生産の両方が可能で、第 2 章で記述したキドロン道路沿いのスクウォッター集落とはやや趣を異にする。

もう一つの大きな特徴は、イバンに加えマレーやブギスがこの集落に集中していることである。カンポン・ピサンでは、イバン・エリアとムスリム（マレー／ブギス）・エリアに棲み分けがなされていたが、カンポン・プタニは住民すべてがムスリムで、その内訳はブギス 20 世帯、マレー 5 世帯となっていた。ここでは、全 25 世帯がアブラヤシを栽培していた。

(3) カンポン・バルとルマ・ジャラオ…政治的側面

スクウォッター集落での調査を行う中で、元スクウォッター住民でありながら、政治的な理由により自分たちの土地を手に入れた事例が 2 件見られた。

写真 6：Kpg. Pisang のイバン・エリア

写真 7：Kpg. Pisang に住むブギスのアブラヤシ畑

一つはカンポン・バル（Kampung. Baru：図 1 参照）と呼ばれる地域で、第 3 章第 1 節で紹介した RPR セビウ付近のスクウォッター集落に隣接している。見た目はいかにもスクウォッター集落という感じであるが、土地測量局で作成されているリストには載っていない。2000 年ごろに土地測量局による測量が実施され、そこに住んでいた住民に土地が割り当てられたようで、住民は土地登記もされていると話していた。RPR セビウ付近のスクウォッター集落で調査した際、なぜ RPR セビウはスクウォッター集落で、隣接するカンポン・バルはスクウォッター集落ではないのか、違いは何かと住民に尋ねたところ、初めは答えるのをためらっている様子だったが、しばらくして一言、「あの地域に住んでいるのはムスリムだから」と言った。マレーシアではムスリムが優遇される場面が珍しくはなく、公務員でも役職が上がるにつれムスリムの比率が高くなる。ただし、面白いことに、カンポン・バルのマジョリティはムスリムであるが、その一画にイバンも住んでいて、同じように土地を与えられている。行政もあからさまに区別は出来ないからだろうか、ムスリムが集住する地域にいるイバンにも土地を与えたようである。

2 つ目の事例はルマ・ジャラオ（Rh. Jaraw）というロングハウス（54 世帯）で、先述のカンポン・ピサン付近に位置する（図 1、写真 8 参照）。彼らはもともとムザコ（Muzako）と呼ばれるキドロン道路沿いのスクウォッター集落に住んでいたが、1997 年に現在の位置にロングハウスを建てて住むようになった。カンポン・ピサンやスンガイ・プランなどに近く、場所的にも出自的にもスクウォッティングしているように見えるが、土地測量局の職員によると、ルマ・ジャラオはスクウォッター集落ではないという。

このロングハウスには特異な点がある。それはムザコから現在の位置に移動してロングハウスをつくる際、行政による例外的な措置が多く与えられているということである。具体的には、移転のための整地作業を行政が行っていたり、正式な登記はされていないものの土地の区画番号（ロット・ナンバー）が与えられたりしているのである[4]。

このロングハウスは地元でも有名で、現地のタクシー運転手に聞いてみたところ、「あそこの村長は政治的な交渉が上手い」と話していた。事実、ルマ・ジャラオの村長はかつて与党政党である PBB（Parti Pesaka Bumiputera Bersatu）と関係の深いサバラカス（Saberkas）という名の団体組織で数年働いた経験があり、その時に政治家や政党とのつながりを作ったと考えられる。村長自身が「このロングハウスの住民はみんな PBB 支持者である」とも語っていた。

スクウォッター住民と行政や選挙候補者とが政治的な交渉を行うことはマレーシアでは珍しくなく、むしろこうした事例があまり見られないビントゥルの方が特異だと言えるかもしれない。

4. スクウォッター集落からの転出

スクウォッター集落から出る人の動きに注目すると、聞き取りのなかで多かったのは、出身の村（ロングハウス）に帰る人、行政が用意した低所得者向け住宅もしくは宅地を購入し自宅を手に入れる人、その他ビントゥル内外に土地を買って家を建てる人、出身村近くの都市に移動する人などであった。ただし、現在スクウォッター集落に住んでいる人々に今後移動の予定や意思があるかと質問すると、ほとんどの人が「No」と回答している。職場との近接性や収入の良さ、教育の質の高さ、買い物や病院といった生活の快適さなどが理由として挙げられていた。以下では、行政による再定住スキームと、空港近くに建設されたスクウォッター住民移転用の住宅団地について見ていこう。

(1) 行政による再定住スキーム

キドロン地区周辺に作られた再定住スキームは、土地を区画ごとに分けて廉価販売し、住宅はその購入者が自分の収入に合わせて好きなように建てることが出来るという形態で、BDA や土地測量局のもと、複数のプロジェクトがこれまでに行われてきた。これらの土地に関しては、誰でも申請するこ

写真 8：Rh. Jaraw のロングハウス

とが出来るが、採用者を選定する際、ビントゥルに土地を持っていないことに加え、収入・家族の人数・ビントゥル滞在年数などを基準に優先度が決められる。スクウォッター住民であることも優先度を上げる一つの要素になるという。

スンガイ・プラン・ロット[5]（Sungai. Plan Lot：写真 9 参照）と呼ばれる、キドロン地区に建設された再定住スキームでは、キドロン地区のスクウォッター出身者を複数見つけることが出来た。このスンガイ・プラン・ロットにおけるスクウォッター出身者の割合は、住民に聞いたところ、6 割や 8 割などばらつきがあり確かな数字は分からないが、相当数の元スクウォッター住民がここに移動してきていることが分かる。ただし、申請は受理されたものの土地の値段[6]が高くて払えず、やむなく辞退したスクウォッター住民も多くいたともいう。現在スクウォッター集落に居住する人々のなかには、この再定住スキームに申請書を提出し結果を待っている人や、すでに書類は受理され区画の割り当てを待っているという人々もいた。

このように、再定住地区も準備されているが、スクウォッター住民全てを収容できるだけのキャパシティはなく、また土地購入のための資金を持たない人も大勢いるため、スクウォッター集落の立ち退きには部分的な効果しかもたらしていないと思われる。先行例としてのミリやシブのスクウォッター移転政策では、広大な再定住地区をほぼ無料に近い形（手数料のみの支払い）で用意し、集落全体を一気に移転させるという方策がとられていたが、ビントゥルは、異なる形態の移転用地を複数用意するという形で、徐々に進められているという印象を受ける。次節では、これまでの移転政策では見られなかった住宅団地の賃貸アパートという移転先について見ておきたい。

（2）賃貸アパートへの移転事業

現在、スクウォッター住民を対象に行われている重要な政策がある。それは、サラワク住宅開発公社（HDC：Housing Development Corporation）[7]の管轄のもと、ビントゥル空港付近のスガン地区に建設された住宅団地 PPR BANDARIA PARK（通称スガン・アパート：Segan Flat）への移転事業である（写真 10~11 参照）。この住宅団地はキドロン地区の開発によって立ち退きに追い込まれたスクウォッター住民のための移転先で、5 階建てのアパートが A 棟から Q 棟まで 17 棟建設され、合計約 1,000 部屋が用意されている。2013 年 12 月より、特に立ち退きの緊急性の高い家族（つまり開発がすぐ近くまで迫っている場所にいた人たち）から優先的に入居が進められている。住宅団地への移転に関しては、申請したものの許可が下りず他のスクウォッター集落に移った人や、闘鶏用の鶏を飼うために移転申請をせずスクウォッター集落にとどまっている人、申請を受理されたものの辞退した人など様々だったが、その反面、住宅団地で出会った人のなかには「他のスクウォッター集落に移ることは行政が許さなかった」という人もおり、移転に際してある程度の強制力が働く場合もあるようだった。

写真 9：Sg. Plan Lot の住宅と空き地（未分譲地）

スガンの住宅団地の大きな特徴は、賃貸のアパートであることだ。これまで他の都市で行われてきた対スクウォッター政策では、再定住スキームによる宅地分与が主流で、プレミアムと呼ばれる土地取得手数料を分割で払い、払い切るとその土地は自分のものになるというのが一般的であった。しかしスガンの住宅団地に関しては、月に RM150 の家賃を払い続けなくてはならない[8]。HDC によると、3 年ごとに居住者審査があり、支払いや生活態度が良好であるとされればさらに 3 年延長可能で、最長 9 年まで住むことが出来るが、その後どうなるかはまだ決まっていないという。また、土地測量局の職員はスガン・アパートへの入居条件に関して、月収が RM650 ～ RM 2,500 の世帯に限るという制限があると話していたが、HDC で確認したところ、直近 3 か月分の給料明細の提出を義務付けてはいるが、選定委員会はクチンのオフィスが担当しているので、給与額が審査の基準に使われているかは分からないという回答だった。

この団地は、本来は立ち退きに迫られたスクウォッター住民専用のものであるが、実際は約 300 部屋がムスリム用として準備されており、そこに住むムスリムの大半はビントゥル周辺の村や町に住んでいた人たちであった。ムスリム居住者のなかには公務員もおり、彼らの場合は申請から受理までが非常に速かったという。ここでもムスリム優先という意図が見え隠れしている。

スガンの住宅団地に移転した元スクウォッター住民たち

は、職場のキドロン地区まで、会社の準備した送迎バスや乗り合いのバンなどを利用して通勤する。子供たちのなかには、転校して近くの小中学校に通う生徒もいるが、転校を嫌がって今もキドロン地区の学校に通う児童・生徒も多い。スクール・バスは距離に応じて価格が異なるので、運賃が高くついて仕方がないと嘆く親もいた。

スガンの住宅団地は、賃貸であること、職場・学校や街から遠いこと、畑作りや家禽飼育も禁止されていることなど、いくつかの不満を抱えながらも、他に行き場がなく移転してきた住民たちが大半を占めているように感じられた。

5. ビントゥルのスクウォッター住民の「交渉力」

スガンの住宅団地は、キドロン地区の元スクウォッター住民にとっては、市街地にも職場にも子供の学校にも遠くなってしまい、不便さを感じている人が多い。また、アパート内の居住空間は 65.03m2 で 4K と、スクウォッター集落の住居に比べてはるかに狭くなっている人が多い。そして、最大の不満は賃貸で将来的な再転出の可能性も残されているという点である。

一方、キドロン地区ほかの再定住スキームは、現在のスクウォッター住民たちが移転するには、区画数が明らかに不足しているにも関わらず、一般からの申請も受け付けられて

写真 10：スガン住宅団地の入り口

写真 11：スガン住宅団地の敷地内

いること、土地の価格も比較的高く設定されていることなどから、スクウォッター住民には敷居の高い移転先となっている。行政は、再定住スキームや賃貸アパートのほかに、低価格住宅の建設も進めているが、キドロン地区に住むスクウォッター住民たちにとって、誰もが購入できるものになるとは考えにくい。

これまで、クチンやシブ、ミリなど、サラワクの主要都市で行われてきたスクウォッター移転政策は、ほかの国々から見れば非常に贅沢なものであった。サラワクに限らずマレーシアのスクウォッター住民は、フィリピンやタイのような「暗いスクウォッター」ではなく、公務員などの安定職への就業率も高く、将来的な土地の取得可能性が高い「明るいスクウォッター」などと呼ばれることもあった。そうした従来の政策と比較したとき、ビントゥルにおけるスクウォッター移転政策は、それほど条件のよいものにはなっていない。そこには、ビントゥルのスクウォッター住民の「交渉力」の弱さという背景があると考えられる。

クチンやシブなどの他都市では、選挙を利用した政治家との大規模な交渉も事例として確認されてきた。たとえば、1990 年代前半に成長のピークを迎えたシブのスクウォッター集落では、住民の 4 割以上が公務員職に就いており、彼らの職場のひとつであった土地測量局や公共事業局などから情報を収集して、スクウォッター住民自身が再定住地区の建設場所を提案した。彼らは、都市部の与党議員に投票することと引き換えに、その再定住地区に合法的な土地権を得ることに成功したのである。クアラ・ルンプールやクチンでも、スクウォッター集落は重要な票田とみなされることが多く、政治家との交渉のなかでそれらの移転政策が決まることが多い。

ところがビントゥルでは、ルマ・ジャラオの例を除き、このような動きがほとんど見られない。カンポン・バルの事例も、ムスリム集落に紛れ込んだわずかなイバンが土地を取得できたに過ぎない。ビントゥルのスクウォッター住民の交渉力が弱い主な要因としては、マレーシアの他都市と異なり、ビントゥルではキドロン工業地帯を中心に、現場での単純労働者が圧倒的に多く、公務員がほとんどいないため、政治的・政策的な情報の収集手段が限られていること、全般的に学歴が低いこと、遠方から来たスクウォッター住民も多く、交渉に有利な土地勘や地元の社会的ネットワークが希薄であることなどが考えられる。

シブやミリのスクウォッター集落は、基本的にはラジャン川やバラム川流域からの住民によって構成されていた。クチン

はより広い範囲から人が集まっていたと思われるが、州都としての都市の性格や、1980 年代後半に再定住政策が実施されたという時代背景などが、ビントゥルとは大きく異なる。1980 年代以降に急速な発展を遂げた工業都市ビントゥルのスクウォッター集落は、クムナ川やタタウ川という近隣の流域人口を吸収しただけでなく、サラワク各地から単純労働者を集めることになった。このように、ビントゥルのスクウォッター集落の住民構成は、キドロン地区を中心にした工業発展の経緯と密接に関わっている。そのことが、他都市とは異なるスクウォッター集落の性格と、近年の移転政策のあり方に反映されていると思われる。

6. おわりに

1980 年代初頭以降の急速な開発により、ビントゥル都市部およびその周辺ではスクウォッター集落が出現し、その後増大していった。近年では、さらなる開発の進行によってスクウォッター集落からの移転が政策として行われており、ビントゥルのスクウォッター集落は新たな局面を迎えている。特に、工業地帯として指定され開発が進んでいるキドロン地区には、スクウォッター集落が集中し、立ち退きによる空き家も目立つ。また、キドロン地区以外の地域でも、旧市街近くの RPR セビウでは商業活動を希望する人々が集まったり、人口が少なく土地が十分にあるカンポン・プタニとカンポン・ピサンで農業生産が盛んであったりなど、立地の違いからそれぞれ特徴が表れていた。政治的な特権や繋がりを用いて、スクウォッター住民が合法的な土地を得たという事例は、カンポン・バルとルマ・ジャラオの 2 例が存在した。

スクウォッター住民の多くは転出の積極的意思を持たないものの、開発の進行によって、それまで生活していたスクウォッター集落からの立ち退きを余儀なくされ、やむを得ず転出するという事例が多いようであった。転出先は様々であるが、政府が用意している代表的なものとしては再定住スキームによる区画分譲と移転用賃貸アパートの供給が挙げられる。しかし、再定住スキームに関しては用意されている区画の数が十分でないこと、スクウォッター住民では払うことがなかなか難しいような金額であること、スクウォッター住民以外でも申請できることなどが課題となり大きな効果を上げるには至っていないように感じられた。移転用アパートに関しても、賃貸であることや市街地から遠いこと、部屋が狭いことなど、いくつかの短所がある。さらに、クチンやシブ、ミリといった他の都市と比較すると、これらの状況がビントゥルに特有のものであることがより明瞭となる。ビントゥルでこのような特徴が生じたのには、背景として、ビントゥルの急速な工業発展という経緯がある。開発による周辺地域の環境変化がスクウォッター集落の住民構成に大きな影響を与え、現在のスクウォッター集落における特徴を生み出した。そして、このような住民構成のあり方が、「交渉力」の弱さという結果をもたらし、政策の方針が従来とは異なるものへと変化したと言えるのではないだろうか。

＜謝辞＞
今回現地調査をするにあたって、高知大学農学部教授の市川昌広さん、同じく高知大学農学部 3 年生の高橋一弘さんには、聞き取り調査に同行して頂き、研究の方向性や調査計画の検討等、多くの場面でご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

脚注

1 キドロン道路沿いのスクウォッター集落には、水道局から上水が提供されており、毎月各世帯に請求書が送られてくる。集落によって異なると思われるが、例えば Sebatang Tengah では 1993 年に上水道が設置されたという。新たな住居を建設した場合は、家まで自力でパイプを繋げなくてはならず、雨水や河川の水でしのぐ事例も珍しくない。最近になってスクウォッター集落に入った人のなかには、すでに上水道を引いている他人の家からパイプを繋いで自分の家に引き込んでいる事例も見られた。

2 土地測量局のリストでは 29 世帯となっていたが、実際には 25 世帯であった。

3 カンポン・ピサンもビントゥルの都市域に近いため、土地測量局による調査は行われている。この集落は「都市域外スクウォッター（*setinggan lular bandar*）」と分類されている。

4 私たちの案内役を務めてくれたビントゥル在住のイバン（元森林局職員）は、内陸部のロングハウスが建てられている場所は測量や登記が行われていない州有地であることがほとんどだと話し、「ルマ・ジャラオはサラワクのなかで唯一、政府からロット・ナンバーを与えられた合法的ロングハウスだ」と冗談交じりに強調していた。

5 市川昌広氏が行った土地測量局および BDA への聞き取りによると、Phase 1（土地測量局担当、1994 年建設）に 415 区画、Phase 2（BDA 担当、2002 年建設）に 309 区画が造成されたという。

6 各筆の面積によって金額は異なるが、土地の価格と登記・販売手数料等を含め、一筆 15,000RM 前後で手に入れることができるという。これらの金額を区画割り当て後 6 か月以内に支払いきれば、その土地は土地測量局から TOL（Temporary Occupation License）が発行される。これは 1 年ごとの更新になっており、3 年間きちんと更新が続けられ、当該の場所に家屋が立っていることが確認されれば、正式な土地権を取得することができる。

7 サラワク州住宅省の管轄下にある独立行政法人。

8 クアラ・ルンプールやジョージタウンではアパートへの移転も珍しくはないが、過去に行われた移転政策は、賃貸ではなく分譲が主流であった。

「交流の場」としての闘鶏―
―都市移住民の娯楽と文化

祖田 亮次（大阪市立大学 文学研究科）
池田 愉歌（大阪市立大学 文学部）

マレーシア・サラワク州のイバンにとって、闘鶏は非常にエキサイティングな行事であり、社会的・文化的な意味でも重要な娯楽である。収穫祭などの祭りのときや通夜・葬儀のほか、大規模なイベントの際には、必ずといっていいほど闘鶏が行われる。農村部を訪ね歩くと、イバンの祭りの日でなくとも、祝日にはしばしば闘鶏に出くわすことがある。闘鶏会場では、サイコロやカードによる賭け事も並行して行われ、また、アルコールを含む飲料のほか、焼き鳥や揚げ菓子などが販売されることが多い。近年では、闘鶏会場を取り仕切るのは華人が中心で、イバン以外の民族が参加することも少なくない。仕切り屋のなかには、体中に派手な刺青を入れている者もいて、なかなかの迫力があったりする。

農村部での闘鶏は、特別な日に行う行事という風情で、近隣の村々から大勢の人々が集まってくる。イバンの大きな祭りのときであれば、特別な行事として政府によって闘鶏が認められることもあるが、基本的には非合法の賭け事の場であると考えてよい。ただ、村のなかで行う闘鶏であれば警察に見つかる心配も少なく、闘鶏会場に集まった人々も当該行事の違法性について、とくに気にする様子もない。

一方、都市部においても闘鶏を見ることができる。たとえば、ビントゥルの旧市街から10数km北東にキドロン地区という工業地帯があり、そこに向かうキドロン道路沿いには、数多くのスクウォッター集落が存在している。華人やマレー、ブギスなどのスクウォッター住民も少数存在するが、住民の大多数はイバンであり、これらのスクウォッター集落においても闘鶏が盛んにおこなわれている。私たちが訪ねたスクウォッター集落には、闘鶏の足に装着するブレードを作る職人も複数いた（写真1～2）。

私たちは、ビントゥル在住のイバン男性に誘われて、独立記念日（の振り替え休日）にスクウォッター集落の闘鶏会場に行ってみた。土～月曜日の3連休を使って3日連続で試合が行われていた。私たちが訪れたのは3日目であったためか、前日までよりもエントリー数が少なく午後からの開催となったが、それでも試合開始前の段階でおよそ60名が集まっていた。カードやサイコロを使ったゲームは、闘鶏の試合開始前から行われていた。会場に集まっていた人の多くはスクウォッター住民であるようだが、ビントゥルの市街地からきている人もいるらしい。

このスクウォッター住民たちは、毎週のように場所を変えて闘鶏に興じているという。取り仕切っているのは華人ではなく、スクウォッター集落のイバンである。イバンが闘鶏を取り仕切るのは今どきでは珍しい光景で、かなりローカル色の強い闘鶏会場という感じがした。全体として、賭け金も小さい。スクウォッター住民たちの経済状況を反映しているのかもしれない。

写真1（上下）：闘鶏用のブレードを作る職人（撮影：祖田 亮次）

写真2：闘鶏用のブレード　（撮影：池田 愉歌）
工業用電気のこぎりの刃（手前）から闘鶏用のブレードを作製する。

当日の闘鶏会場は、キドロン道路からダート道を入った、やや奥まったところに設営されていた。各スクウォッター集落からやや離れた空き地であるため、参加者たちは車やバイクを使ってやってきている。車はすべて、キドロン道路の出口に向けて止められている。警官が来た時にすぐに乗って逃げられるようにしているのであろう。一方、会場の仕切り屋は、出口に近いところに駐車している車を、もっと奥の方に入れるように参加者に指示している。駐車位置が出口に近すぎると、大通りのキドロン道路からでも人が集まっているのが察せられるため、よろしくないという。同行してくれた地元のイバンは、私たちが調査目的で来ていることを理解しており、「仮に警官が来ても、下手に逃げるのではなく、外国人として知らぬ存ぜぬを貫くこと、調査に来てたまたま闘鶏に出くわしたと言い張ること」と何度も念押ししていた。

その会場で、私たちはたまたまブギスの男性を見つけ、スクウォッター住民として珍しい事例だと思い、試合が始まるまでの時間にインタビューをした。実際に調査をすることで、もしもの時にも言い訳が立つ。その彼は、両親がサバ州に出稼ぎに来ていた時に、そこで生まれ育ったのでマレーシア国籍を持っているが、彼の居住しているスクウォッター集落には、インドネシア・スラウェシ島出身のブギスもいるという。アブラヤシ栽培が盛んな農村部と同様に、ブギスのイバン社会あるいはサラワク社会への浸透が感じられる。

そのブギス男性も、自分の鶏を連れてきていた。私たちは、初戦のブギス対イバンの試合を見た（写真 3 ～ 4）。インタビューに応じてくれた彼は物腰の柔らかい静かな中年男性で、対する若いイバンはすでにしたたか酔っぱらっていて、妄言を吐き散らし、周囲に散々迷惑をかけていた。多くの人々は（そして私たちも）、密かにブギス男性を応援した。

初戦の試合の出場者は、それぞれ 50 RM を仕切り屋に出していた（写真 5）。敗者はそのまま 50 RM を失うことになる。勝者は勝利金として受け取る 50 RM のうちの 1 割を仕切り屋に納める。一方、この日の賭け主への配当割合は、7:3 であった。たとえば、10 RM を賭けた鶏が勝利した場合、10 RM とその 7 割の 7 RM を合わせた 17 RM が手元に戻ってくるというシステムである。差額は仕切り屋の懐に納まることになる。試合直前、仕切り屋を通さず個人的に賭ける相手を探す人々も会場の中央に集まり「money, money」「〇〇 RM」と大声を出しうろうろと歩き回っていた。試合が近づくにつれ、人がごった返し、騒然とした異様な雰囲気へと変化していく。そして、試合の結果は、ブギスの勝利であった。

エントリー数の少なかった当日は、試合と試合の間のインターバルが長かったが、皆が警察のパトロールを警戒していて、農村の闘鶏会場とは異なる緊張感が常に漂っていた。闘鶏会場で捕まった場合は、1,000 RM の罰金か、1 週間の禁固刑に処されるという。私たちもなんとなくそわそわしてしまい、長居は無用と早々に退場することにした。

同じ日の夕刻、空港近くのスガン地区にある大規模な住宅団地にも調査に行った（写真 6）。ここは、スクウォッター住民を移転させるために政府が準備した住宅団地で、5 階建てのアパートが 17 棟建ち並び、約 1,000 世帯が入居している。私たちは、スクウォッター集落からここに移転してきた人々へのインタビューをしようと考えたわけである。現在もスクウォッター集落に居住している人たちのなかには、移転先のアパートでは闘鶏ができなくなるから移転申請はしたくないという人もいた。しかし、スガンの住宅団地に行ってみると、団地の外にあるやや奥まった空き地で、やはり闘鶏が行われていた。

私たちは、団地のゲートの外に建ち並んでいる常設屋

写真 3：鶏の足にブレードを装着する　（撮影：市川 哲）

写真 4：闘鶏の試合　（撮影：市川 哲）

写真 5：対戦表　　（撮影：祖田 亮次）

台（写真 7 ～ 8）の一つに腰を下ろし、そこで焼き鳥を売っている中年女性にインタビューを始めたが、一緒に団地までやってきた友人 2 名は私たちのインタビューには付き合わず、そのまま闘鶏会場に向かった。屋台の女性に闘鶏のことを聞くと、ライセンスが出ているというが、信用はできない。他の人は、「ライセンスはイバンの大祭の時にしか出ない。独立記念日のようなマレー（連邦政府）の行事の時に許可が下りるわけがない」と話していた。

私たちが屋台の女性にインタビューを始めて闘鶏のことなど忘れかけていた時、そこに 2 台のパトカーがやってきた。今にも停車しそうなノロノロとした動きで、屋台周辺にいる人たちは、そのパトカーを凝視している。「昨日、ここの屋台で酔っ払いが喧嘩をして騒ぎを起こしたから、そのパトロールだろう」という人と、「いや、あれは闘鶏会場を探しているのだ」という人で見解は分かれたが、ともかく闘鶏会場には私たちの友人がいたので、携帯電話に連絡して、すぐに会場を離れるように指示した。その直後、屋台の並びを眺めるかのようにゆっくりと動いていたパトカーが徐々に速度を上げて、闘鶏会場のある丘の方に向けてダート道を入っていった。

あとから聞くと、闘鶏会場の入り口付近で見張り役をしていた男たちの警告で、会場にいた人たちはみんな逃げ惑ったそうだが、結果的に警察に捕まった人はいなかった。パトカーが闘鶏会場に到着した頃、友人たちは裏山を駆け上っていたという。その後、他人の野菜畑を踏み散らかして走り抜け、団地の裏手に回って金網の破れた部分を匍匐前進ですり抜けたあと、いかにも団地から現

写真 6：スガンの住宅団地　　（撮影：祖田 亮次）

れたふりをしながら、表のゲートから屋台に向かって歩いてきた。一見澄ました様子だったが、実際にはほうほうの体で逃げてきたようで、白いシャツは汗と砂埃でドロドロになっていた。私たちは屋台に座りながら、裏山を走る男たちの姿をはるか遠くに認めたとき、友人たちの安否を気遣いながらも、実際には腹を抱えて笑っていた。「あそこまで逃げれば、大丈夫だ！」と。そして、屋台に戻ってきた彼らの逃走劇を聞いて、ますます可笑しくなった。

どうやら警官たちは、闘鶏会場にいた人々が逃げ惑うなかで、人間ではなく鶏を取り押さえていたらしい。なかなか会場から戻ってこないパトカーをこっそり見に行った人から聞くと、自分の鶏を取り押さえられた男が、それを返してもらうために「袖の下」をいくら払うかの交渉をしていたそうだ。大金をかけて購入し、筋肉増強剤などの高価なエサを与え、大事に育ててきた闘う鶏を、勝利の誉を受けないままに、あるいは勝利金を得ないうちに、簡単に手放すことはできない。警官も当然それを知っているわけである。人間を捕まえるより、鶏を捕まえる方が「稼ぎ」になる。闘鶏会場にいる人々にとっては、自分が捕まって牢屋に入ることになるか、鶏が捕まってそれを取り戻すために大枚をはたくことになるか、その時の警官の行動次第のようである。

イバンにとって、闘鶏は欠かせない娯楽の一つであり、文化でもある。移転先のアパートに行くと、闘鶏もできないし、畑も作れないし、移転なんかしたくない、と主張するスクウォッターたちがいた。闘鶏用のブレード作りをしていた男は、スクウォッター集落を追い出されたら、故郷のロングハウスに戻るだけだと話していた。たしかに、アパートの立ち並んだ団地での生活は窮屈であろう。部屋は狭いし、たくさん階段を上らなきゃならないし、職場や学校

写真 7：住宅団地前の屋台群　（撮影：池田 愉歌）

写真 8：住宅団地前の焼き鳥屋台　（撮影：池田 愉歌）

からも遠いし、街へ行く乗合バンの運賃も高い。娯楽も少ないのかもしれない。しかし、アパートに移った人々は、時に警察の「手入れ」から逃げ惑いながらも、移転先で今も闘鶏を続けている。

この住宅団地は政府主導で作られたものであり、ムスリム世帯も一定数含まれているため、団地の敷地内では酒も豚も販売できないことになっている。当然、闘鶏もできない。しかし、団地のゲートを出たところには、小さな屋台が立ち並び、夕方や休日はそこで買い物をしたり、酒を飲み交わしたりする人でごった返している。時には酔っ払いがけんか騒ぎを起こしたりもする。屋台を経営している人も、そこで買い物する人も、ほとんどが団地のアパート住まいである。屋台の裏側の空き地には畑があって、野菜やトウモロコシが植えられている。団地の住民たちが勝手に植えているのである。そして、そこから丘の方に 5 分ほど歩いてくと、表通りからは見えない窪地に闘鶏会場がある。

同じ形の建物が無機質に並んでいるだけに見えるアパート群だが、そこにも少しずつ有機的なコミュニティができ始めているように感じられた。アパートに転居した彼ら／彼女らは、もともと色々な街を転々としてきた人たちで、スクウォッター集落での居住経験も長い。どこに行ってもそれなりに楽しみながら生きていく術と逞しさを持っている、とでもいうべきであろうか。

警察の手入れからうまく逃れてきた友人たちは、団地のゲートを出たところの屋台に座り、ビールで渇いたのどを潤し始めた。別ルートで逃げてきた男たちが同じ屋台の隣席にいることに気付き、互いの無事の帰還を祝し、握手と杯を交わしていた。まるで戦場から戻ってきた同志のようで、見ていてすがすがしさを感じてしまった。

パトカー騒ぎで私たちのインタビューは吹っ飛んでしまい、闘鶏会場がお開きになったため客も一気に増えたので、屋台の女性はいつの間にか仕事に戻って忙しそうにしていた。インフォーマントを失った私たちは、「そういえば今日は祝日だからねえ」などと言いながら調査を放棄して、焼き鳥でビールを飲み始めた。そして、鶏を小脇に抱えてバイクで猛然と走り去る男たちの姿を見ながら、またしても腹を抱えて笑っていた。鶏を抱えて逃げ果せた人、運悪く取り押さえられた人、それも一つのゲーム性あるいは博打性をもった偶発的な出来事であり、それらの話をネタに焼き鳥を喰らいながら酌み交わす酒は、いつも以上に楽しい宴席を提供してくれる。

都市部での闘鶏会場には、農村と違った緊張感と話題が充満していた。闘鶏は、イバンの祭りの時に行われる儀礼的スポーツとされるが、他地域の人々や他民族との交流の場でもあり続けた。闘鶏会場に華人やその他の民族が混ざっているのも、本来的に不思議な話ではない。農村部での闘鶏会場は、実際のところ華人のチンピラたちに牛耳られてしまっている感が否めないが、スクウォッター集落や住宅団地の闘鶏会場は、イバンが中心となって運営しており、そこにときどきブギスや華人、マレー人も参加する。

サラワク各地から集まってきた「他人」同士のイバンが集住するスクウォッター集落では、このような交流の場は、実は農村以上に重要な社会的意味を持つのかもしれない。しかも、そこにさまざまなハプニングが伴うことで、人々の絆と仲間意識がむしろ強められることもある。イバンの男たちにとって、闘鶏はどこにいたってやっぱりやめられない真剣勝負の娯楽・文化であり、都市における社会関係の形成の場でもあるのかもしれない。

低価格バードハウスの建設条件

ロギー・スマン（元マレーシア・サラワク森林局）

はじめに

私がアナツバメを呼び込むバードハウスについて研究し始めた理由の一つは、より革新的で現実的なバードハウス建設の契機を見出し、白ツバメの巣の販売という魅力的な産業に、農村部の人々や中産階級グループが参入するためのよりよい機会を提供したいと考えたからである。

サラワクでは、裕福な人々や企業体などがバードハウスの建設に投資をしてきた。たとえば、3 階建てや 4 階建てのバードハウスは、30 ～ 40 万 RM（1,000 ～ 1,300 万円台）の費用がかかっている。そこで、こうした高額バードハウスのオルタナティブとして、たとえば 35,000RM（約 117 万円）程度の低価格で、周辺設備や電気機器なども含めた形での 1 階建てバードハウスが建てられるのなら、関心を持つ多くの人にとって建設可能な施設となるだろうと考えたのである。

さらに言えば、低価格バードハウスは資本投資に対するリスクの軽減という意味も持つ。より戦略的に考えれば、数多くの小規模バードハウスを持つ方が、事態の急変や設備維持という観点から考えれば、専門的知識を持って投資するにあたって、持続的な対応能力を持ちうると思われる。昆虫が豊富でアナツバメの主要な飛翔ルート付近にバードハウスを建設しさえすれば、大規模バードハウスとの競合という点も大きな問題にはならない。つまり、大企業との競争という部分は考慮しなくてもよいのである。

インドネシアやタイは、それぞれ約 100 年前、80 年前にアナツバメの養殖を始めたという。半島マレーシアでは 30 数年前に始まったばかりで、大規模な産業としてようやく成長し始めたのは、アジア通貨危機直後の 1997 ～ 98 年の頃であった。当時、多くの産業が困難な局面に直面し、マレーシア中で企業が倒産していくなかで、バードハウスは代替ビジネスのひとつの選択肢であった。

バードハウス産業成長のもうひとつの契機は、1997 年にインドネシアの森林で大規模な火災が発生し、そこから逃れるようにアナツバメが大量にマレーシア側に移動したことである。サラワクにおいては、この時期にバードハウス産業が盛んになったと言われている。

ツバメの巣の主要な買い手は、中国、香港、台湾、シンガポールなどである（Merikan 2007）。2011 年の中頃にツバメの巣の価格暴落（未加工品 1 キロ当たり 1,500RM まで落ち込んだ）が起こるまで、4,500 ～ 6,000RM で売買されていた白ツバメの巣は、香港や中国での末端価格は 15,000 ～ 25,000RM にまでなっていた。香港や中国では、ツバメの巣は消費することがステータス・シンボルとなる商品とみなされたり、あるいは健康増進剤として捉えられたりしていた。また、薬品として、ビタミン・サプリメントとしても利用されてきたのである（Merikan 2007）。

サラワクにおいては、非常に裕福な華人たちが食する以外、ツバメの巣が現地で消費されることはほとんどない。個人的なことを言えば、私自身もこれまで 2 回しかツバメの巣を口にしたことがない。1 度目は華人の友人に、2 度目は藤田さんにごちそうになったわけである。クチンでは、ほんの小さな椀に入ったツバメの巣のスープが 60RM していた。

バードハウス建設の条件

天候等にもよるが、アナツバメは 5:30 ～ 6:30 ころ、夜明けとともにバードハウス外へと飛翔しはじめる。飛翔範囲は半径およそ 25km とされるが、空が暗くなる前の 15:30 頃にはバードハウスに戻ってくる。アナツバメの飛翔能力は非常に高く機敏であり、空中で交尾することができる。また、エサとなる昆虫を口の中に塊状にして蓄え、それをバードハウスで待つ雛たちに与えることもできる。

ブディマン（Budiman 2010）によると、アナツバメには主要ルート、第 2 ルート、逸脱ルートの 3 つの飛翔ルートがあるという。主要ルートではアナツバメが大きな群れを形成し、同じ地域を滑空する。アナツバメにとってもっとも重要な飛翔箇所としては、昆虫が数多く存在する場所、つまり、マングローブ林や広大な稲作地、休閑二次林、植林地、アブラヤシ・プランテーションなどの上空ということになる。アナツバメは上空 20 ～ 50 m ほどの位置を飛行する。

第 2 ルートでは、アナツバメは第 1 ルートよりも小さな群れを形成して飛翔するが、そのルートは第 1 ルートからはそれほど遠くないという。3 つ目の逸脱ルートは、滑空箇所が固定されているわけではない。ルートを逸脱するアナツバメの数はごくわずかだが、その逸脱の理由は主に 2 つある。第 1 に、空中の昆虫を追っているうちに集

団からはぐれてしまうという場合で、第 2 に、タカや大型コウモリなどの天敵から襲われた際に身の安全から集団を離れるという場合である。こうした逸脱ルート上にバードハウスを建設するのは適切ではない。

バードハウスを建設する場所は非常に重要である。サラワクにおいて最も成功しているバードハウスは、アサ・ジャヤ（Asa Jaya）からスブヤオ（Sebuyau）／リンガ（Lingga）／ムルドム（Meludom）にかけての地域、プサ（Pusa）／カボン（Kabong）からサリケイ（Sarikei）／シブ（Sibu）、マトゥ・ダロ（Matu Daro）にかけての地域など、主に沿岸地域に立地している。ムカ（Mukah）からビントゥル（Bintulu）にかけての沿岸地域、シミラジャウ（Similajau）からブクヌ（Bekenu）／ミリ（Miri）も同様に、ツバメハウスの立地場所としてはよい。

ツバメハウスを建設する前には、その立地場所の状況をチェックしなければならない。具体的には、少なくとも 1 週間に 5 回以上、朝の 6:30 ～ 9:00 ごろと、夕方の 16:00 ～ 19:00 頃にかけて、交尾時の鳴き声を拡声器で流してみることで、ツバメの集まり具合を見る。そして、最低でも 50 羽以上のアナツバメがその音声に反応し反響定位を行ったり、拡声器上空付近を滑空・旋回したりして、地上から 10 m 以下を飛び回っていることを確認しなければならない（Salekat 2010）。

赤道はちょうど、インドネシア・西カリマンタンのポンティアナック（Pontianak）あたりを通過しており、サラワクは赤道よりやや北に位置していることになる。したがって、太陽光による熱の影響を避けるために、バードハウスは東西方向に水平に建設し、「モンキーハウス」[1] は北に入り口を向けて設置しなければならない。というのも、南側の方が北側よりも熱せられやすいからである。以下は、外的環境から受ける温度上昇をいかに軽減するかのガイドラインである。

a. 屋根は建物の上甲板梁に接する形で設置してはならず、およそ 50 cm 離して設置する。その場合、上甲板梁から三角屋根の頂上部までの距離は 2 m ほどになる。このオープンスペースが外熱を遮断する効果を持っており、さらに、ここに熱放射用のベンチレーターを設置するのがよい。

b. 薄いアルミニウムの屋根が、外部の表面熱を反射するので効果的である。ただし、内側から熱気を出すためのアルミニウム製エア・ダクトを同時に設置する必要がある。

c.「モンキーハウス」の屋根は、午後、西側からの太陽熱による温度上昇を軽減するために、約 30 度に傾斜させる必要がある。

d. 建物外の側溝は、幅 30 cm、深さ 45 cm のものを、バードハウスの外壁および基礎部分に接する形で設置し、そこに雨水をためる。側溝の末端部分には水道蛇口を設置して、月に 1 回は側溝を掃除できるようにする。外壁に接する形で側溝を設置するのは、ひとつには「冷却システム」としての効果を持たせることであり、もうひとつは、ヤモリやアリ、ネズミなどの外敵がバードハウス内に侵入するのを防ぐという意図がある。

e. ムリア（Mulia 2009）によると、バードハウスの入り口の大きさは、初期段階では 40 cm x 100 cm としておき、巣が作られるようになったら、15 cm x 100 cm に狭くすべきであるという。それは、バードハウス内に太陽の光と熱が入るのを防ぐと同時に、フクロウやコウモリなどの外敵の侵入を妨げるためである。

バードハウスの室内の気温は摂氏 26 ～ 29 度、湿度 75 ～ 95%に維持しなければならない。理想的な光量は 3 ルックス程度である（Mulia 2009, 2010）。室内の飛翔エリアは 3 m x 3 m 以上なければならない。というのも、飛び立ったばかりの若いアナツバメが飛び方を覚えるうえで危険でない程度の広さが必要だからである。

通気口および湿度調整口としては、60 ～ 120 cm の長さの PVC パイプ（塩化ビニール管）を使って、全ての壁面の地上 1.0 m の高さのところに 1.0 ～ 1.5 m の間隔で横一列に取り付ける。そして、そこからさらに 3 m 高い位置に、同じように列状に通気口を取り付ける。

床と壁はコンクリートにしておくべきである。湿度を高めるためにバケツや壺などを置いて水をためておくとよい。床は週に 2 回水洗いすべきである。梁や壁に取り付ける棚板はメランティ（*Shorea spp.*）材が最適である。大きさは 2 cm x 15 cm とし、両側に 2 本の浅い溝を並行して彫っておく。棚板どうしの距離は通常 60 ～ 70 cm である。

バードハウスへの人間の出入り口は二重ドアにしておかなければならない。また、北側のアナツバメ用の入り口に支障をきたさないよう、南側に作る必要がある。アナツバメの反響定位音を出せる高音域用メイン・スピーカー

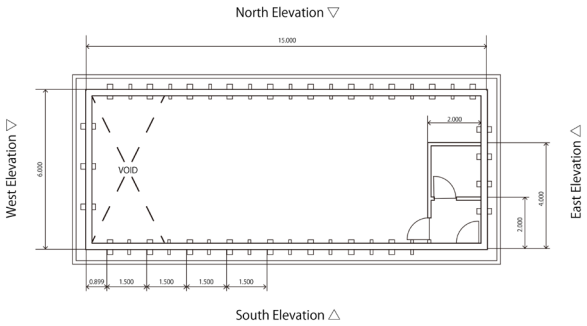

図 1: バードハウスの一例（平面図）

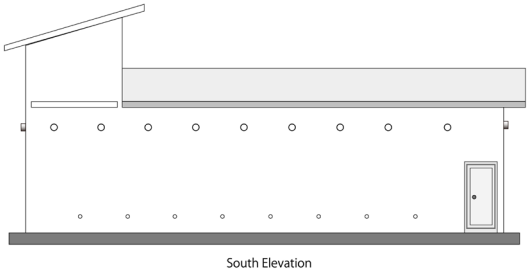

図 2: バードハウスの一例（長辺面）

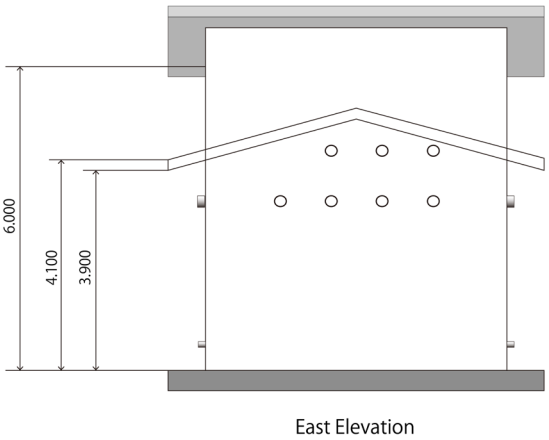

図 3: バードハウスの一例（短辺面）

は 60 度の傾斜で出入り口上部に設置し、通常は交尾時の鳴き声を流す。ひな鳥の各種さえずり音は「モンキーハウス」の内部に設置したスピーカーから流し、飼育時の鳴き声を出すスピーカーは営巣エリア内に設置する。

アナツバメの鳴き声を MP3 形式で収録した CD は、初期段階でアナツバメを呼び寄せるためだけでなく、その個体数を増加させるためにも継続的に使用される。音声ファイルは USB メモリーやカード式メモリーに保存してもよい。それらの鳴き声を大音量で流すために、音楽用アンプ一式が必要となる。朝の 6:00 ～ 10:00 と、夕方の 15:30 ～ 19:30 くらいにその音を流すのが理想的である。これらの電気機材は、クチンやシブ、ビントゥル、ミリなど、サラワクの主要都市で手に入れることができる。

バードハウス建設のライセンス

未加工の白ツバメの巣を地域内の市場に出す場合に、ライセンスを持っているかどうかは特に問題にならない。たとえば、プサやカボン等の地域では、地域外の産品も扱うシブやサリケイのバイヤー（頭家）が買い付けにやって来る。主要都市であれば、少量のツバメの巣であっても、サプライヤーが森林局発行のライセンスを持っているかどうかを聞くこともなく、バイヤーが購入してくれる。ビントゥルやシブなどの都市では、バイヤーの使い走りが、サプライヤーたちにツバメの巣の販売を強要するなどして、価格を操作したりしている。

都市部の商業地区や住宅地区等では、バードハウスのライセンスが発行されることはない。ライセンス発行の条件は以下の通りである。

a. コメやゴム等の特定品目に特化していない農業用地であること。

b. 有効な土地登記簿があり、担保等にも入っていないこと。

c. バードハウス建設用地は主要な都市から 15 km 以上離れていること。小規模都市や市場町（たとえば、リンガやメルダム、パンダンなど）から 5 km 以上離れていること。そして、ロングハウスや村落から 1 km 以上離れていること。

申請書は建設計画の内容を記したワーキングペーパーとともに、森林局に 5 部提出しなければならない。それらは、サラワク企画庁（SPA）、土地測量局、保健局、自然資源環境局に 1 部ずつ転送される。まず、SPA が閲覧をする。そして、森林局がその他の省庁で出されたレポートをまとめて SPA に結果を転送し、最終的に SPA が申請を認めるか否かの判断を下す。申請が認められれば、申請者に通知され、300RM を支払うことでライセンスを取得することができる。毎年のライセンス更新料も同じ金額である。

SPA がどのようにして申請書の諾否を決めているのかは不明瞭である。審査員は、州副首相と 2 名の VIP、および議長としての州首相から構成される。森林局は、

現在サラワクに存在するバードハウスは 5,000 件にのぼると推定している。ところが、現職の森林局職員の話では、これまでに受け付けた申請書は約 3,000 通になるものの、そのうちライセンス発行が認められたのは、たった 400 件しかないという。ここで一つ言えることは、ある種の高圧的な力が働き、申請がことごとく却下されてきたのであろうということである。

私が推奨するのは、高さ約 4 m の飼育エリアを持ち、地上から 6 ～ 7 m の高さに「モンキーハウス」を付けた、低価格 1 階建てのバードハウスの建設である。フロア・レイアウトとしては、6 m x 15 m 程度の長方形が望ましい。このようなバードハウスであれば、電気機器も含めて 35,000RM 程度で建設可能だと思われる。ただ残念なことに、2011 年半ば以降、未加工白ツバメ巣の価格が最近では 1 kg あたり 1,500RM 程度に落ち込んでしまっている。この価格が 3,000RM くらいまで回復すれば、バードハウスを建設する見込みが立つであろう。

参考文献

Budiman, A. et al. 2010. *Panduan bengkap wallet*. Jakarta: Perpustakaan Nasional.

Merikan, H. S. 2007. *Abstract of the 2007 Malaysian swiftlet farming industry report*. Penang: SMI Association of Penang.

Mulia, H. 2009. *Buku pinter budi daya bisnis walet*. Jakarta: PT Agro Media Pustaka.

Mulia, H. 2010. *Cara jitu memikat walet*. Jakarta: PT Agro Media Pustaka.

Salekat, H. N. 2010. *Membangun rumah walet hemat biaya*. Jakarta: PT Agro Media Pustaka.

脚注

[1]「モンキーハウス」とは、インドネシア語では "*rumah munyit*" と呼ばれ、アナツバメが飛翔しながらバードハウスに入っていくための小さな入口部分のことを言う。

（日本語訳：祖田 亮次）

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川　登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田　亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野　泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原　薫	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ﾋｽﾄﾘｰ	政策研究大学院大学
	水野　広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地　直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀　基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島　弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田　素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山　治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	首都大学東京 都市環境学部
	津上　誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野　克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川　昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉　都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方　史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川　哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道　有頂	ﾗｲﾌｻｲｸﾙ･ｱｾｽﾒﾝﾄ	日本エヌ・ユー・エス株式会社（JANUS）
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	田中　耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間　香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林　篤史	歴史学	政策研究大学院大学
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤　大輔	地域研究	国際林業研究センター
	Jason Hon	動物生態学	WWF マレーシア
	加藤　裕美	文化人類学	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田　淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野　雄一	河川生態学	九州大学 工学研究院
	竹内　やよい	生態学	国立環境研究所
	目代　邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹　真二	映像人類学	モイ
	木谷　公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中　園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根　英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外の方にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：（nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：（http://biomasssociety.org/）で見ることができますので、そちらの方もご参照ください。

（鮫島弘光）

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX:075-753-7338
http://biomasssociety.org
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀（基盤S事務局）

ビントゥル郊外での闘鶏の試合
（写真：市川 哲）